

別府八湯ものがたり

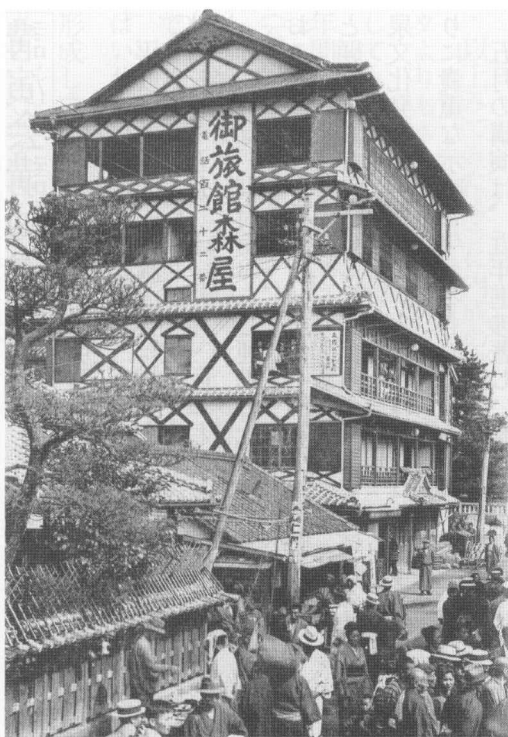
一 別府温泉の「五重の塔」

文・資料 平野資料館長 平野 芳弘

別府温泉にも、かつて「五重の塔」があったらしい。三〇年近く探していたその写真が近ごろ見つかった。この木造五階建て「森屋旅館」は、大正九年に建設され、わずか六年後の大正一四年に火災で全焼したために、写真資料がほとんど残っていない。

別府温泉では、明治時代から既に三階建ての旅館が建てられており、大正時代になるとさらに木造四階、五階建ての建物も建築されていった。

当時は、全国各地から別府温泉にやって来る多くの湯治客とともに、建築になくはならない腕利き職人や材料になる大木なども多く集まり、別府ならではの温泉文化を築いていったのである。



（番二二一話電）（樓階五）館旅屋森 場泉温府別後豊

記載されている。また、抜け出た五階の屋根瓦には「モリヤ」の屋号が書かれていて、すぐ近くの別府港に入る観光船からも目に入る広告塔の役割も果たしていた。この写真は、大正時代のもので、左端は現在の市営竹瓦温泉（昭和一三年改築）がある場所で、右端は少し見える石塀と松林が明治四年にできた波止場神社（現存）である。竹瓦温泉前は着物姿の湯治客であふれており、日本髪の女性やかんかん帽子をかぶった男性でにぎわっている様子もうかがわれる。

昨年八月七日には、まったく同じ場所で今年六回目の「ゆかたdeピンポン二〇〇五」が開催され、浴衣姿の男女約三〇〇人でにぎわった。

この別府温泉のシンボルである竹瓦温泉界限は、今も昔も多くの人をひきつける、これからのまちづくりの核となる場所である。

二 天下一品の天然海浜砂場

路地裏散歩出発の九時三〇分になった。緑の旗を先頭に修学旅行のようにぞろぞろと歩き始め、狭い路地裏に行く前に、かつて「東洋のナポリ」とうたわれたすばらしい海岸線を見学する。散策途中のポイントでは、昔の写真を取り出して別府今昔を説明している。左の写真は昭和初期の北浜海岸天然海浜砂湯（昭和四〇年に閉鎖）の様子で、左上の石積みは明治四年建設の旧別府港堤防（一部現存）である。子どもたちの足裏には小波が打ち寄せていて気持ち良さそうである。中には

浮き輪を持っている子供もいて、子供から大人まで砂湯も海水浴も楽しめるすばらしい観光スポットであった。

参加者の八〇歳前後の元気なおばあちゃんが「この子は私が小さい頃や！」とみんなを笑わせてくれた。今日のボランティアガイドはうまくいきそうである。

昭和一二年の別府案内によると「海浜一帯潮が退けばその干潟には稜々として神代ながらの霊泉が泡立ちつつ湧出している。その所を僅か五六寸掘り下げて身を横たへ暖砂に埋まれば暫時にして全身自ら温まり、水平線の彼方に浮き出でたる四国の島々を寝ながらにして眺めつつオゾンを満喫するうち、のたりのたりと寄せて返す波の音に必ずや無我の境に誘い込まれるであろう。これをわざわざ見に来る人もやがては見られる人となる。将に天下一品なり」（以上原文のまま）と紹介されている。

北浜天然海浜砂湯の温泉は、今でも海中より静かに湧き出て千年以上の歴史を刻んでいる。「人と海とのふれあい」をキーワードに泉都別府のまちづくりのため、平成一三年度から別府海岸保全施設整備事業が始まった。

「別府渚の しおたれ砂湯 かけた思いが とどくやら」

（作・野口雨情）

さらに路地裏散歩は奥へ奥へと続いていく。



三 海の眺望・泉都随一

路地裏散歩ご一行が旧別府港（明治四年完成）にやってきた。
ここでは、文学作品の別府訪問記を紹介しながら説明を行なっている。



別府は、やはり海からはいり海から出ていくところらしい」（小説「菩提樹」丹羽文雄作）

この写真は、大正一〇年ころの別府棧橋（大正九年完成）の様子である。まさに入港しようとしている船は、阪神別府航路に就航し「海の女王」と呼ばれた「むらさき丸」である。右端の木造三階建ての建物は高砂屋旅館で、この付近一帯は「海の眺望・泉都随一」と宣伝されるほど広々として素晴らしい景観であった。この旅館の前ではたくさんの見物人がいて、日傘をさしている人、乳母車の前で遊ぶ親子、車に乗り込む人々などの港町温泉町ならではのどかな雰囲気伝わってくる。

この写真でガイドを始めると、参加者の皆さんは身を乗り出して聞いてくれる。

「小夜ふけて いづらへむかう 舟ならむ けたたましくも 笛の鳴れるは」

（竹久夢二作）

明治、大正と一世を風靡した美人画家の竹久夢二も大正七年に、愛人笠井彦乃と二人して別府に来ていた。宿泊先で聞いたこの汽笛の音は、別府棧橋から出航する定期船の汽笛であろうか。

一二月には、第一〇回ベっぷクリスマスHANNABIファンタジアが開催され、花火と音楽の共演に、全国各地から多くの人が毎年この場所に見物にやってくる。今も昔もこの楠港埋め立て地は、いろいろな人々との出会いと別れを演出してくれるまちづくりの交流拠点である。

さらに路地裏散歩は奥へと続いていく。

四 歩行者天国の海岸通り

路地裏散歩ご一行が国道一〇号の流川交差点にさしかかった。横断歩道の信号待ち時間を利用して、早速、昔の写真を取り出して説明をはじめた。

この写真は、昭和初期の温泉まつりの様子で、場所はここ旧別府棧橋付近の海岸通り（現在の国道一〇号）の情景である。この日はあいにくの小雨模様で、別大路面電車の未舗装の軌道敷に水たまりができていて、傘をさして歩いている人もいる。現在の交通量の多い国道一〇号と違い、当時の海岸通りは車もない歩行者天国で仮装行列がゆっくり安全に行進している。

温泉の守護神として祀られることの多い七福神の大黒天や寿老人の大きなかぶり物や、各商店の屋号の入ったユーモラスな箱をかぶった人々もたくさん行進をしているのどかながら圧巻である。温泉まつりを盛り上げるために、仮装行列に参加する多くの旅館・商店の人達も、いろいろ工夫を凝らして長い時間をかけて準備したことであろう。このような楽しい仮装行列に出会えると、立ち止まって見入ってしまうそうである。

さらに、調子のよい温泉まつり音頭も作られた。

温泉祭音頭

ハア、ゆうべ見た人、また朝見川、ヨイヤサ別府よいとこ、

帰り忘れて湯につかる、ヨイヨイヨイトナ

（作詞：石松夢人）

現在、別府観光再生のために、まつり・イベント検討委員会で四大まつりの見直し検討が行われている。市民がまつりにどれだけ多く楽しく参加できるかということが重要なポイントであると思う。

路地裏散歩ご一行が、しばらく立ち止まって説明を聞いていると信号が青に変わった。係員が大きな声で「信号が短いので早く渡ってください！」と参加者を誘導する。

路地裏散歩はさらにゆっくりと奥へ続いていく。



五 東洋一の別府大仏

天満町にあった別府名所の大仏のことは今でも観光客から尋ねられることが多い。

この写真は、昭和三年三月に大仏が完成したころの様子で、「このところ人間様が蟻にみえ」と大仏の大きさを賞賛して詠まれている。写真の中で、大仏の右肩に梯子で登ってポーズをとっている人は本当に蟻のように見えてくる。

この別府名所の大仏は、鉄筋コンクリートで建設され、奈良の大仏より大きく東洋一・世界一とPRされて世界中からも多くの観光客が訪れていた。

説明によると、高さ八〇尺（約二四・二M）。蓮台一八角。台直径八〇尺（約二四・二M）、台周圍二四八尺（約七五・二M）。蓮台周圍一九八尺（約六〇・〇M）。顔長さ三三尺八寸（約七・二M）。顔巾九尺四寸八分（約二・九M）。鼻高さ三尺八寸（約一・二M）。螺髪数千個。親指回り六尺四寸（約一・九M）とすべて巨大である。

この大仏は、平成元年四月に老朽化のために危険になり残念ながら取り壊されてしまった。

しかし、すばらしいものは時代を超えて多くの人にいつまでも語り継がれている。

路地裏散歩ご一行が、江戸時代の元商家前にある「歌人丸山待子先生生地」文学碑の説明を聞いたあとに、飲泉で有名な路地裏情緒あふれる「紙屋温泉」にやってきた。

ここでは「この温泉を毎日飲みよると病気はせんでえ！」と八五歳になる元気な番台のおじさんが説明してくれる。

寒朝を温泉に足浸す母上の七十にちかき歳をおもふ

（作 丸山待子）

参加者の中には

温泉前の足湯に浸かって心癒される人もいる。

今年も八湯ウォークは、多くの人に色々な感動を与えながらゆっくり続いていく。



（佛大 所名府別）
 尺十八徑直台。角八十寸蓮。尺十八寸高。尺八十四百二圍周台。尺三十二寸長顔。尺八十九百圍周台蓮。尺八十四百二圍周台。個八千數髪螺。寸八尺三寸高鼻。分八寸四尺九寸顔。寸八寸四尺六寸親指親。

六 日本一の歩行者天国「楠銀天街」



Great Sight of Dippu.

・別府温泉・楠銀天街

別府温泉の別荘地帯。この通りは、
日本一の歩行者天国である。山崎天来堂の看板。

路地裏散歩のご一行が流川通りの楠銀天街アーケード入口にやってきた。年配の参加者からは「昔は人通りが多くて向こうが見えなかったのになあ!」と若い頃を思い出して話してくれる人もいる。

早速、昭和三〇年代頃の楠銀天街全盛時代の写真を取り出して説明を始める。

丹前姿で町を散策する人や別府土産を買い求める観光客で肩も触れ合うほどにぎわっていた様子が分かる。説明文には「殷賑を極める泉都一の繁華街にして灯ともし頃ともなればネオン輝き不夜城と化し、浴後の散策者に賑ふ」とある。別府絞りなどを置いている土産品店や時計めがね店・寿司屋・洋品店などがたくさん並んでいる。このアーケードは昭和二八年に新設され全長は約四三〇m（現在約三七〇m）で、当時としては、日本一の長さを誇る理想的な歩行者天国のアーケードであった。

これからさらに高齢者や身障者の方も参加して安全で安心な町歩きを行うときには、この歩行者天国「楠銀天街」エリアは人に優しいまちづくりの拠点になる場所である。かつて、この周辺の商店街を散策する「別府湯の町音頭」（作詞・徳丸一郎）もつくられた。

君を松（待つ）原よく北（来た）浜よ湯の町別府は 嬉しかる共に忘れぬ

中浜通り便に着いたか 届いたかサッテモ ヨイヨイ ヨイヤサノサ

さらに路地裏散歩はゆっくり奥へと進んでいく。

七 絶景の「乙原の滝」

路地裏散歩のご一行が秋葉町にある旧秋葉通りにやってきた。この路地の最初の交差点で写真を取り出して説明を始めた。「ここは、数年前までは共同温泉があり、昔はお湯に浸かって乙原の滝を見ることが出来たので滝見温泉と呼ばれていました」すると「えっ、そんな露天風呂があれば入ってみたい！」と女性の声で思わず一同に笑いが起きた。

この写真は昭和初期の「乙原の滝」で、滝の流れは二段二条に分かれて落下しており、上段は雌滝、下段は雄滝と呼ばれていた。また、滝の近くにはかつて滝見台や休憩所も設置されていて、近くの別府遊園地と並んで別府観光名所だった様子がわかる。

この絵はがきには「別府遊園地 夏尚寒き 音原の飛瀑」と書かれていて、乙原の滝の飛瀑が遊園地内に飛んできて夏には天然冷房の役割を果たしていたことがわかる。また、『大別府史蹟名勝』（昭和一〇年）では「飛瀑断崖絶壁に懸かり、落下する事二百丈、爆音ととうとうと溪間に響く。故に下流一帯の丘陵を音原と称す」と紹介されている。

現在は、滝の落ちる位置が台風で移動して、遠くから滝の落ちる様子はほとんど見えなくなり、訪れる人も少ない。

しかし、かつては別府湾の船上や共同温泉の湯舟からも山の中腹に白い滝を見ることができて、まるで一幅の山水画のような絶景であった。

これからの別府のすばらしい自然景観を生かしたまちづくりにおいてこの「乙原の滝」周辺は、今も昔も拠点となる重要なエリアである。

滝見台 滝も見ゆれば 海も見ゆ

(作詞：池内たかし)

さらに路地裏散歩はゆっくり奥へと進んでいく。



八 名所旧跡の宝庫 「流川通り」

路地裏散歩ご一行が別府商店街発祥の地である流川通りにやってきた。この周辺には、明治・大正・昭和期のいろいろな見所が多い。別府が女性バスガイド発祥の地ということで、早速、七五調で流川名勝解説を始めた。

「ここは名高い流川、情けのあつい湯の町の、メインストリートの大通り、旅館商店軒ならび 夜は不夜城でございます」

(不老暢人作詞)

今回は、長崎から一五名の参加である。最近は、全国各地からまちづくり研修として「別府八湯ウォーク」に参加する団体も多くなった。「長崎は思案橋、別府では名残橋。遊び方で所変われば名も変わります」と説明すると長崎のみなさんから笑顔がこぼれた。

この路地裏散歩がきっかけで長崎市とのまちづくり交流もはじまった。

この写真は昭和初期の「温泉まつり」の様子で、未舗装の流川通りがまつり広場になり、ハイカラな商店街には紅白幕や万国旗が全線にわたりにぎやかに飾られている。

車道では、献湯祭、仮装行列、地獄鬼おどりなどのユニークなイベントとともに、日本髪を着飾った女性が優雅に行進する行列がまつりを一段と盛り上げている。

沿道では観光客も市民も一体になって温泉に感謝する祭りを楽しんでいる。

どこからか「別府湯の町音頭」(作詞 徳丸一郎)も聞こえてきた。

春は楽しや 温泉祭り 湯の街別府は 人の波 昼は桜よ 夜は夜でネオン

歌も浮き浮き 流れ川 サツテモ ヨイヨイ ヨイヤサノサ

これからの別府八湯のまちづくりにおいて、名所旧跡の宝庫である「流川通り」は今も昔もにぎわいの重要な拠点である。

今年の別府八湯温泉まつりから、ゆけむり提灯行列も復活し八湯ウォークはさらにゆっくりと続いていく。



九 「東洋のナポリ」の別府湾

朝風呂散歩のご一行が北浜海岸にやってきた。今朝は、市内外から一六名の参加である。海を見ながら「この遠方に見える島が四国です」と説明する。「えっ、ここから四国がみえるの!」と驚きの歓声があがる。

朝風呂散歩は、早朝六時すぎに竹瓦温泉前に集合して海から昇る日の出を見る。そして、早朝の町並みを散策しながら、いくつかの共同温泉をはじめとするウォーキングである。観光客には好評である。

この写真は、昭和初期の松原住吉神社の海上渡御祭（ホーランエンヤ）の様子である。毎年七月二七日に行われており色鮮やかな大漁旗や竹笹で飾られた多数の宝来船の船列が勇ましい。たくさん見物人がいて、かんかん帽や麦わら帽子をかぶった男性や日本髪を結んだ女性はほとんど着物姿である。手前では傘をさした子供たちが無邪気に遊んでいる様子がわかる。昔から、瀬戸内の別府湾は、船と月と高崎山がよく似合うようである。

わが庵は 高崎山の 月一つ

(作詞 温泉太郎)

これからの海を活かしたまちづくりにおいて、船や高崎山が見えるすばらしい景観は、別府らしさを演出するうえで大切なものである。別府湾のはるかかなたの水平線から朝日が昇るころ、誰かが「瀬戸の島々」(作詞・山下彬磨)の歌を口ずさんでいた。

瀬戸の島々よ 浪々越えて

豊後別府へ はるばると

豊後別府は 東洋のナポリ

今じゃ世界の湯の都

別府八湯ウォークはさらにゆっくと続いていく。



十 別府八景「浜脇公園」

別府八湯ウォーク「浜脇温泉セピア色散歩」はJR東別府駅からスタートする。

この日は少し早めに家を出て、出発時間まで元浜脇公園（現在の浜脇中学校）の下見を行った。この高台に登ると、美しい別府湾や扇状地形の市街地さらには立ち上る湯煙やなだらかな鶴見連山までがパノラマ状に一望できる。

八湯ウォーキングガイドのときは、「海の見える別府の眺めは、昔から東洋のナポリと賞賛されていました」と必ず説明している。この写真は、大正時代の別府名所浜脇公園の様子で、別府八景の一つでもあった。この高台にある浜脇公園は、浜脇駅開通と同じ年の明治四四年完成である。

ここでは、ゆっくり腰掛けて展望できるように木製ベンチや茅葺屋根の東屋、さらに植樹・庭石・街灯までが整備されている。後ろには高崎山も見えて、四方八方どこから見ても素晴らしい景観でゆっくりくつろげる公園であった。明治・大正・昭和と全国から入湯客がここを訪れて、素晴らしい別府の自然景観にたくさんの方が心身とも癒されたことであろう。

別府八景「浜脇公園」

海のがめは 金毘羅山よ

山に花咲きや 里も花

里に日暮れて 一浴あびりや

顔をほんのり 桜いろ

（作詞 不老暢人）

これからの浜脇のまちづくりにおいて、この素晴らしい海の見える景観の保全活用はますます大切になってくる。

修復保存されたJR東別府駅は、温泉も近くにあり、高台の景観も素晴らしく、さらに周辺にレトロな風情の町並みの残る駅ということで、最近、全国の鉄道ファンからも注目されはじめています。

間もなくウォーキング出発である。参加者もかなり集ってきて、地元浜脇のガイドさんからも笑顔がこぼれ始めた。

別府八湯ウォークはさらにゆっくりと進んでいく。



別府名所（別府名所） 浜脇公園

十一 木造七階建ての「ひょうたん温泉閣」

別府八湯ウォーク「鉄輪湯けむり散歩」は毎月第三日曜日に開催されている。昔ながらの湯治場の雰囲気を含に残す路地裏を、地元ボランティアガイドの説明を聞きながら歩く湯けむり散歩は参加者に好評である。

地元ボランティアガイドが、ひょうたん温泉の前で昔の写真を取り出した。

「この写真は、昭和二年に建築された木造七階建てのひょうたん温泉閣で、鉄輪温泉のシンボルでした。戦争中の昭和二〇年五月に米軍機の攻撃目標になるということで、わずか一九年で撤去されました」と説明が行われた。参加者の中に、昔この建物に登ったことのある年配女性から「本当にもったいなかった!」とため息も聞こえてきた。

この絵葉書には「浴場の趣向珍しき瓢箪温泉」とあり、高さ六〇尺(約一八・二m)のひょうたん温泉閣で最上階の七階部分は、最高の湯けむり展望台であった。

また、この一見不安定なひょうたん型の建物が強風などで転倒しないように鉄の番線で四方八方引っ張っている様子も分かる。写真右端には、高崎山も見えている。

昭和一二年発行の大別府案内書には「見物するだけの価値でも充分。瓢箪型建築の展望台に食事を運ばせることも出来る。実にこの趣向は、見るに足り、遊ぶに足り、学ぶに足るものがある」と解説されている。

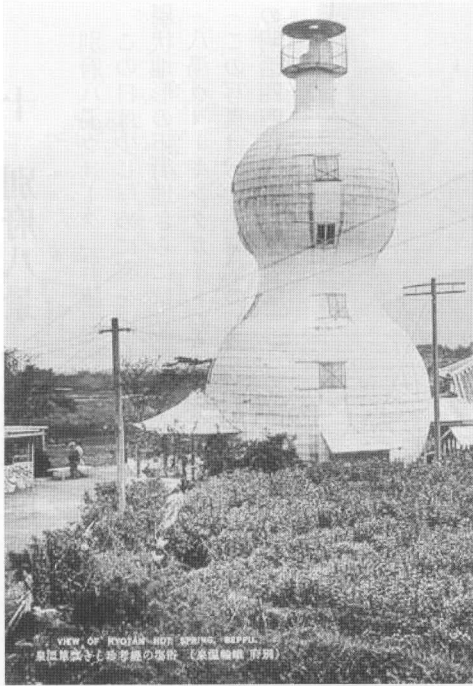
これからの鉄輪温泉のまちづくりにおいて、湯けむりの見える自然景観の保全活用がますます大切になってくる。

今年三月には、鉄輪温泉の高台に「湯けむり展望台」が初めて設置された。

前に高崎 後に鶴見 由布は見えぬか 湯のけむり

(作詞：山下彬麿)

別府八湯ウォークはさらにゆっくと進んでいく。



十二 別府名所「堀田温泉場」



堀田温泉場 (別府名所)

別府八湯ウォーク「堀田湯の里湯けむり散策」は、毎月第二日曜日に開催されている。このコースの途中には、市内を一望できる陣所跡、櫓のある泉源、歴史を感じさせる石畳などもあり、堀田ウォークは歴史的な遺跡と自然環境がマッチしていて素晴らしいと参加者に好評である。

この写真は、大正時代の堀田温泉郷で、木造三階建の温泉宿や茅葺屋根の民家も多く建ち並んでにぎわっていた様子が伺える。温泉宿の周辺は自然環境が素晴らしい、緑あふれる山々に囲まれて、棚田や湯けむりも見え、さらに池の水面に写った建物の影を見ながら、昔から多くの湯治客が心身ともに癒されたことであろう。湯けむり散策のご一行が、アジサイの花が満開の湯けむりたなびく白糸の滝にやってきました。

市内の参加者の男性から、「長年別府に住んでいたけどこんな絵のような素晴らしい滝があるとは知らなかった！」と歓声が上がった。地元ボランティアガイドも説明について力が入って、額から汗がにじんでいる。

天下第一の

温泉に入る幸や

朝涼し

(作詞 大谷 旬仏)

これからの堀田温泉郷のまちづくりにおいて、この素晴らしい自然環境の保全と活用がますます大切になってくる。

さらに別府八湯ウォークはゆっくりと進んでいく。

十三 別府三勝「志高湖」

別府八湯ウォークのときには必ず、「別府は山と海といで湯の町です」と参加者にガイドを行なっている。ところで昭和初期の別府三勝といえば「仏崎（大分市）」「志高湖」「内山溪谷」でどれをとっても自然環境・景観のすばらしい場所が選ばれている。

この写真は昭和初期の志高湖周辺の様子で、人工的なものはなく奥に鶴見山と由布山が並び、湖周辺はゆるやかな丘陵地が続いており、写真左下には人が一人立っていて大自然の雄大さが伝わってくる。

昭和初期には、一日散策エコーツアーとして乙原の滝と志高湖と城島高原と猪の瀬戸と塚原温泉と内山溪谷の景勝地をつなぐ約二四キロのコースを秋の別府観光の目玉としてすでにPRしていた。このエコーツアーは山岳あり、溪谷あり、高原あり。滝・湖・温泉・伝説などもあって変化に富んで、今でも他に類を見ないほどのすばらしいコースである。

別府市民読本（昭和一三年発行）の中で「杉林を通り抜けると志高湖に出る。周囲は三キロもあろうか。水を満々と貯めて澄んでいる美しさ、舟でも浮かべて見たいほどである。ここは海拔六百メートル、夏季には湖畔に市営のキャンプ村が開設される」と当時の様子が書かれている。

これから温泉と自然環境を大切にする別府の癒しのまちづくりにおいて、志高湖周辺の自然環境保全と観光活用はますます大切になってくる。

やがて別府三勝「志高湖」（不老暢人作）の詩も出来上がった。

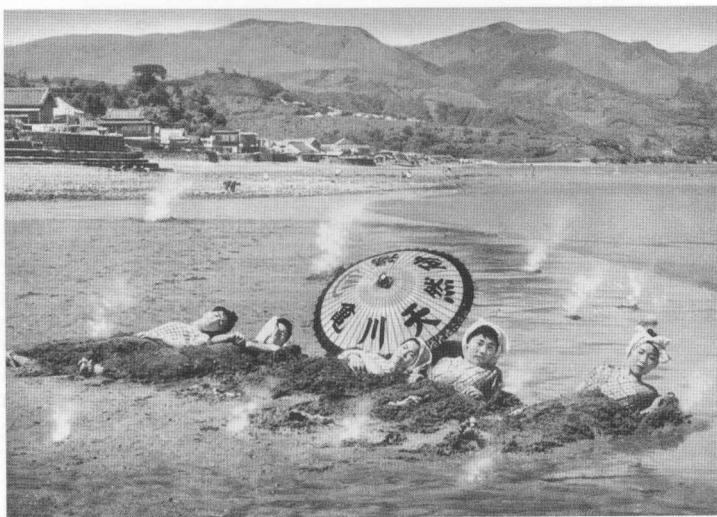
志高可愛や 鶴見と由布が すがた映して みず鏡

水はあふれて 谷間を縫ふて 里のむすめの 化粧水

別府八湯ウォークは、秋空の下さらにゆっくりと進んでいく。

十四 佳境の亀川天然砂湯

別府八湯ウォーク「人情の町亀川湯遊散策」は毎月第一日曜日に開催されている。明治四四年完成のJR亀川駅舎前には、すでに県外客を含めて約一五名の参加者が集まっている。受付時にマップと一緒に配布される手作りの亀の小物を子どもたちが手に取って遊んでいる。この亀には亀川温泉のことをいつまでも忘れないでとの熱い思いが込められている。台風一過のさわやかな秋空のもと、



いよいよ地元ガイドさんの「おはようございます」のあいさつで出発する。古くから栄えた亀川温泉場を散策するツアーは、浜田温泉・亀陽泉・四の湯温泉の共同温泉をはじめ一般家庭の内湯なども見学しながら、懐しい町並みを散策していく。

亀川散策ご一行が亀川新川交差点にやって来た。この写真は、昭和初期ごろの新川河口付近の亀川天然砂湯の実況である。浴衣姿の男女5人が海浜に日傘を立てて気持ちよさそうに横たわっている。周りには一〇か所以上も小さな噴気が立ちのぼっており、この世のものかと驚かされる。また、文化四年（一八〇七年）に豊後の碩学協蘭室の紀行文にも「八丁程の砂湯は温泉中の佳境。海辺に出て亀川という地は冷水なくして、人家に持ちいるもの皆湯なり、川流れる湯に小魚生じ、水草青く、奇というべし」と絶賛されている。

また詩歌にもたくさん詠まれている。

（亀川砂湯）

砂湯人 一つ日傘に 二人かな

（高浜虚子作）

これからの活力ある亀川のまちづくりにおいて、人情味豊かな亀川の人々と全国・全世界の若い学生達との二つの文化交流が進んで、一つの魅力ある町が生まれようとしている。

別府八湯ウォークはさらにゆっくりとすすんでいく。

十五 別府八景 「日出城下海岸」

今宵の別府八湯ウォーク「ゆうぐれ散策」は北九州からのシニアグループ7名の参加である。出発前にリーダーの女性から「車窓から見てくる別府湾は何度見てもいいですね！」と声をかけられてホテルのガイドさんは笑顔で答えていた。

昭和初期の別府八景といえば、高崎山、東公園（浜脇の高台）、乙原観海寺、鶴見ヶ丘、由布院仙郷、実相寺山、柴石溪流、日出城下海岸の八つである。その内の高崎山（大分市）、由布院仙郷（湯布院町）、日出城下海岸（日出町）の三つは隣接市町村で、広域的に別府をとらえてPRしている。

この写真は、昭和初期の別府八景「日出城下海岸」の実況で、歴史を感じさせてくれる老松と、風光明媚な高崎山の見える別府湾の景観がすばらしい。

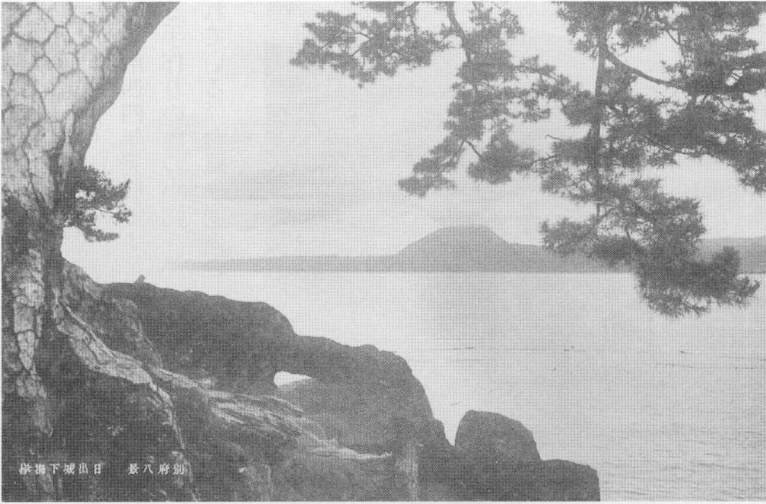
また「市民読本」（昭和一三年発行）には、別府八景「日出城下海岸」について「月に碎くる 金銀波 日出の浦 曲のま静けく 渚につづく老松に 昔を偲ぶ城の跡」と書かれている。さらに、この日出城下海岸で獲れるカレイは城下カレイと呼ばれ、美味で別府の旅館ホテルなどでも名物料理としてよく出されていてこれも昔から別府と馴染み深い。

別府八景「日出城下海岸」（作詞 不老暢人）の歌も出来上がった。

日出は城下 名に負うかれい鰈
寺にや蘇鉄よ 秋は月
鮑あかぬ眺めの 別府湾だいて
夢うつつか ひじ（日出）枕

これからの魅力ある史跡や景勝地を活かしたまちづくりにおいて、近隣市町村との広域的な連携交流がますます大切になってくる。

別府八湯ウォークはさらにゆっくりとすすんでいく。



十六 勝地にして健康地の別府

別府八湯ウォーク「山の手レトロ散策」は毎月第一日曜日に開催されている。

出発地点のビーコンタワーでは、地元子ども会の約三〇人が地域学習のために出発を待っている。

地元ガイドの方は子ども参加者がいる時には、漫画などを使ってわかりやすく説明を行っている。この「別府漫画」(大正一二年…宇崎スミカズ画)は温泉効能PRのために描かれたもので「腰の曲がった老人の無い別府」と題して、手前には別府温泉に到着したばかりで少し腰が曲がりくたびれた様子の老夫婦と、奥にはすでに湯治効果で背筋がびんと伸びてにやかな様子の老夫婦が対象的に描かれている。このような別府に関する漫画の名作は他にもたくさん残されている。一〇時の出発時にガイドさんがこの漫画を見せながら子どもたちに説明をはじめると一斉に笑い声が上がった。さあ、いよいよ出発である。

この散策コースは、大正・昭和期に作られたすばらしい別荘建築や緑豊かな別府公園さらに中央公会堂(現中央公民館)などを見学しながら「古くて新しい別府」を再発見するツアーで、

市民にも観光客にも好評である。

別府市民読本(昭和一三年発行)の中でも「観光遊覧の勝地は多い。しかし、観光に値し、しかも保健療養に適する地は極めて少ない。而して我が別府は、その極めて少ない勝地にして健康地なるものの首位にある」と別府を紹介している。

「日本一の温泉」を活用したまちづくりを進めるために、日本的湯治文化の再発見がこれから大切になってくる。

今年もまもなく、全国各地からこの一年の疲れを癒しにたくさんの方々が別府の温泉にやってくる。

別府八湯ウォークは新年もさらにゆっくと進んでいく。



腰の曲がった老人の無い別府

(7)

十七 別府に来た当時と今

今年の日韓交流四〇周年の節目の年である。先日、別府八湯観海寺温泉で開催されたまちづくり交流会で、韓国の方と話す機会があった。彼は日韓首脳会談が開催されたこのホテルからの海が見える素晴らしい眺めがすっかり気に入ったようである。会議がはじまる前に「最近別府に韓国からの観光客が増えているのはどうですか」と質問してみた。すると彼は、「多くの韓国人が日本で一番行きたい場所は日本らしいところです。韓国人にとって一番日本らしいところといえば温泉地です。中でも別府温泉は韓国で有名です」と話してくれた。



この漫画は大正一四年発行の「別府漫画：別府に来た当時と今」（画：宇崎スミカズ）である。上の図は別府温泉に湯治にきたばかりで、痩せてひ弱そうな夫婦連れが高崎山の見える海辺を杖をつきながら歩いていている様子である。一方、下の二人はしばらく別府に滞在して温泉に入って元気になった今の様子である。胃腸の調子もよく食欲も出て少しふっくらとしており上と対象的に比較できて面白い。また二人して仲良くお茶を飲みながら本を読んだり、煙草を吸いながらくつろいでいる様子を見ると早く別府温泉に行きたくなりそうである。今も昔も別府にくる多くの観光客は、豊富な温泉資源や山と海を備えた素晴らしい景観に心をひかれて別府温泉にやってくる。

これからの国際化・アジアとの連携におけるまちづくりにおいて、この素晴らしい別府ならではの温泉文化と自然景観の保存・活用はますます大切になる。

この韓国の方は、帰り際に「今度来るときは夫婦連れで来ます」と笑顔で話してくれた。

十八 別府八景「柴石温泉」

別府八湯ウォークの柴石温泉エコウォークはイベント時に開催されている。別府八湯の中でも特に緑豊かで秘湯的な雰囲気のある柴石温泉は、今も昔も市内外から多くの入湯客が訪れている。「別府温泉」(大正四年発行)の観光案内で「柴石温泉は幽邃なる山間にあり。数条の湯滝瞭然と落ちる所、溪水その前を早々と流れ巖奇岩瀨をつくりて岩上往々翠松を点ず。踞して清流に足を洗えば、自ずから画中の人たるに近し」と紹介されており、まさに水墨山水画の世界である。

この写真は、昭和初期の別府八景「柴石温泉」の実況で、川底からお湯がわく溪流に老松や様々な奇岩があって、名物の湯滝では、日本髪の女性二人が湯滝に打たれている。近年の土石流災害などでこの湯川に湯滝の野趣あふれる景観は様変わりしているが、この柴石温泉周辺には四季折々の季節の変化を楽しめる自然環境や湯治文化の史跡が豊富に残っている。

福岡から参加した若い夫婦は、ウォーキング後に仲良く蒸し風呂に入って疲れを取り、湯上りに休憩所でゆっくりくつろいでいる。

別府郊外八湯柴石温泉

溪の滝湯が どんと響きや

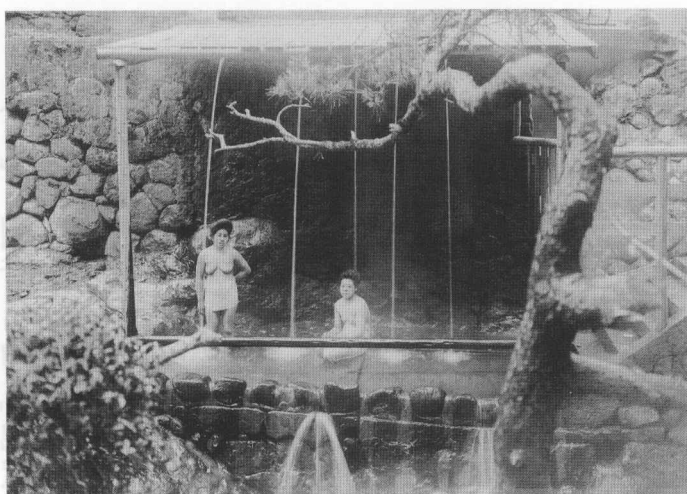
花もおぼろの 旅心

心逢う瀨の 二人で湯治

しばし柴石^{しばせき} 仮の宿

(不老暢人作)

これからの自然環境の保全と活用のまちづくりにおいて、地元の人から観光客まで多くの人が交流しながら学習できるエコウォークの取組みがますます大切になってくる。別府八湯ウォークはさらにゆっくと進んでいく。



(名物の湯滝)

十九 別府名物 「地獄めぐり七五調ガイド」

別府の魅力は、何と言っても豊富な温泉と美しい景観である。さらに今日の別府観光発展の基礎になったのが陸海空の交通便利性の良さと素晴らしい観光ガイドである。

昭和初期には、泉都別府を訪れる観光客の多くは便利な大型バスに乗って「地獄めぐり」を楽しんでいた。そのバスの中では少女車掌が別府の名所・旧蹟を七五調の名調子で観光ガイドを行い大評判であった。

この写真は、昭和初期の「地獄めぐり」での記念写真である。大型バスの前で制服姿の少女車掌やバス運転手、さらに一五人の観光客が写っている。男性は皆帽子を持っていて、背広姿に交じって浴衣姿の人も見える。また女性はすべて着物姿で、洋服を着たかわいい子どももいて興味深い。

別府八湯ウォークの「夜の路地裏散歩」では、各共同温泉の前で湯のまちママさんがガイドが名調子で七五調ガイドを行なっていて、多くの観光客が熱心に聞いている。元少女車掌の村上アヤメさん（九三歳）は今も元気で、機会ある度に「地獄めぐり七五調ガイド」で別府観光を全国にPRしている。この七五調ガイドは現行の「地獄めぐり観光バス」でも実施されており、さらに湯のまちママさんガイドや子どもガイドなどにも広く伝承されている。

これからの別府八湯の観光まちづくりにおいて、別府名物「地獄めぐり七五調ガイド」の活用が大いに期待されている。

地獄めぐり

行き巡る 地獄のいで湯

赤く青く あるいは高く

音たてて噴き

（羽田野 繁子：昭和九年作）

別府八湯ウォークは七五調の名調子を聞きながらさらにゆっくりと進んで行く。

二十 「みんな楽しい温泉まつり」

春になると、市内の共同温泉では温泉まつりのことがよく話題に上る。先日も竹瓦温泉で近所のお年寄りが「昔は、温泉神社を出発した神輿が市内をワッショイワッショイ練り歩いて、提灯を持った長い行列や見物人でそりゃいっぱいやった」と温泉に浸かりながら懐かしそうに話してくれた。

毎年三月末になると、町のあちらこちらにポスターや提灯が飾られて、温泉まつりが近いことを知らせてくれる。

この写真は、昭和九年四月三日の温泉まつりの様子である。中心商店街の楠町青年部の男女一三人が思い思いに水兵や侍姿などに変装し、店のはんてんを着て三味線を持ち、顔を真っ白に化粧して記念写真に写っている。舞台上には、当時別府で有名だった船越写真館の看板も見えている。手前には制服姿の学生達が三味線の歌と踊りの始まりを今か今かと目を輝かして待っている。

昭和の初めごろは、市内の約三〇か所に仮設舞台が設置され各町内会や職場の一隊が入れ替わり立ち代りして芸を演じては、見物人を喜ばせていた。別府ならではのロケル色あふれた市民総出の楽しい温泉まつりにするために、みんなで協力して知恵を絞っている。

今年も町のあちらこちらから、三味線や太鼓のにぎやかなまつりばやしが流れてきた。

温泉まつり

しづかなる 友の家居いせいを

いでて来ぬ 温泉祭の

町のにぎわい

(原常雄：昭和九年作)

別府八湯ウォークは、名調子の別府音頭を聞きながら、さらにゆっくりと進んでいく。



二十一 「別府らしさ」を演出

路地裏散歩のご一行が、JR別府駅にやってきた。今日の参加者は一五人で大阪・福岡・宮崎からの小グループの旅行客である。四〇年ぶりにリニューアルオープンされたJR別府駅周辺は多くの人でにぎわっていた。

早速ボランティアガイドの一人が、駅前で昔の写真を取り出して説明をはじめた。「当時は蒸気機関車で、窓を開ければ煙のヌスで顔は黒くなりました。そのために顔を洗う洗面器も置かれていました」と説明を行なうと参加者から笑い声が上がってきた。

この写真は、昭和一三年ごろの旧別府駅ホームに設置されていた温泉飲泉場の様子である。立派な絞りの着物を着た若い女性二人が、駅のホームで竹製のヒシヤクとカップを持ってお湯を汲んでいるところだ。

この当時、駅のホームにこのような素晴らしい温泉モニュメントがあるのは全国でも珍しく観光客に好評だったようである。

現在、JR別府駅前広場においても官民協働で別府らしいモニュメントを新たに設置するために様々なデザイン検討が行なわれている。

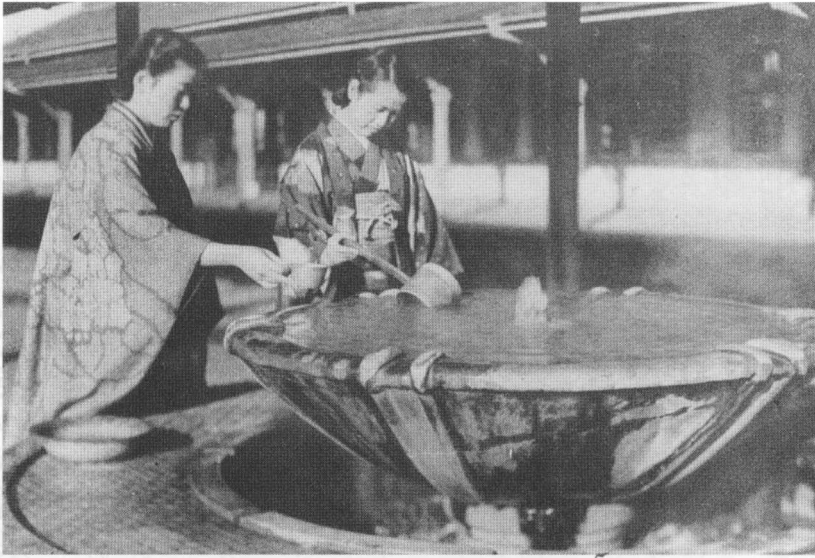
これからの別府観光のまちづくりにおいて、「別府らしさ」を演出するための知恵と工夫がますます大切になってくる。

「別府の駅は、思いのほか小さかった。別府は、やはり海からはいり、海から出ていくところらしい」

小説「菩提樹」

(丹羽文雄作・昭和三〇年ごろ)

さらに別府八湯ウォークは文学散歩をしながら別府駅の中をゆっくりと進んでいく。



二十二 夜の路地裏散歩

別府八湯ウォーク「夜の路地裏散歩」は毎月第二・第四金曜日の夜に開催されている。流し歴五〇年の「はっちゃん・ぶんちゃん」のギターとアコーディオンの心にしみる演奏を聞きながらネオン輝く夜の路地裏を1時間程で楽しく散策を行っている。

スタートは、竹瓦温泉前の「竹瓦小路」からである。

今日の参加者は県内外の女性グループなど約二〇名である。集合場所の竹瓦温泉前では、すでに参加者の男性が今から流しのぶんちゃんと六〇年ぶりの再会をするという話で持ちきりであった。

間もなく重いアコーディオンを肩にかかえた流しのぶんちゃんがネオンの向こうからやって来た。その男性は待ちきれずにぶんちゃんの方へ駆け寄って「やあ、久しぶりやな！」と肩を叩いた。ぶんちゃんも驚いて「あっ」と声を上げてそれ以上は言葉にならない。六〇年ぶりの再会劇に参加者から祝福の拍手がわき起こった。暗やみで固い握手を交わした二人の姿はネオンの光で一層輝いて見えた。

さあ、いよいよ出発である。共同温泉での湯のまちママさんガイドの七五調ガイドは今日も絶好調である。

別府華街流し唄

白い湯けむり 浴びながら

流し慣れたる この街さ

馴染みのお客の 声かかりゃ

よしてきた ひとつ唄おうか

夜の裏街 ああ流し行く

(作詞 手嶋正民)

再会を果たした男性からの「ありがとう」の言葉がうれしくて、流し唄を口ずさみながら家路についた。

別府八湯ウォークは様々な出会いを繰り返しながら、さらにゆっくと続いていく。



二十三 未来の子どもたちへ橋渡し

別府八湯ウォークが始まってまもなく七年になる。市民の暮らしぶりや別府ならではの温泉文化を肌で感じることをできると参加者に好評である。

竹瓦界隈路地裏散歩から始まった市民主体のまち歩きは、今では鉄輪、山の手、浜脇、亀川、堀田など別府八湯全域に広がっている。この別府八湯ウォークは、年間を通じて予約なしに誰でも自由に参加できるという気軽さが受けて、年間五千人以上も参加する新しい別府観光名物になった。また、散策コースのそれぞれの魅力と共に、ガイドの人情味あふれる語り口も人気でリピーター客も多い。最近では、この別府のまち歩きが好評なのを聞いて全国から多くのまちづくり団体が視察研修に来ている。

このために、まち歩きガイド養成にも力を入れていて、今では別府八湯ウォークのガイドができる人は子どもから大人まで約一〇〇人近くになっている。

この写真は、「湯のまちキッズガイド」の地元児童たちが情緒ある市宮竹瓦温泉を自分たちでガイドできるようになるために練習したときの様子である。このキッズガイドの年長組はすでに高校生になっていて、まちで出会うとみんな笑顔であいさつをしてくれる。最近では、学校教育の一環として多くの児童や学生がまちを歩く姿をよく見掛けるようになった。別府八湯の素晴らしい温泉文化を未来の子どもたちへ橋渡しを行うために、地域の人たちが協力してガイド研修を行っている。これは市民あげて本物のまちづくりがすでに始まっている証あかしでもある。

別府八湯ウォークはこれからもさらにゆっくと続いていく。



二十四 別府行進曲

「別府八湯ウォーク」から生まれた市民主体の色々なイベントは、各地域で活発化している。今年も八月七日に開催される恒例となった「ゆかたdeピンポン」大会は、県内外から三〇〇人近くが参加する夏の名物イベントに成長した。この運営は地元ボランティアで全て行なわれており、手作りイベントの温かいおもてなしが好評で、遠方からのリピーター参加者も多い。

この「ゆかたdeピンポン」大会も六年目になると、いろいろな出会いが起きてくる。二〇〇〇年の第一回「ゆかたdeピンポン」大会で、同じパートで試合したのがきっかけで交際がはじまり、今年の三月に見事にゴールインした幸せなカップルも誕生した。五年前に私と同じ職場であった新郎と当時まちづくりに興味を持っていた女子大生で今は卒業した新婦の二人である。

ピンポン大会への参加を呼びかけたのが縁の始まりということで、結婚式ではそれぞれのご両親からスピーチを頼まれた。この写真は、その披露宴の様子で、うれしそうなお新婦の手には思い出のラケットがしっかりと握られていた。

先日二人から届いたお札の手紙に「これからも二人でピンポンのようにラリーを続けていきます」と書かれていて本当にうれしくなった。

どこからとなく、流しのはっちゃん・ぶんちゃんの懐かしい演奏が聞こえてきた。

別府行進曲

別府通いの 汽船の上で

ちらり見交わす 顔と顔

貴方もアベック 私もアベック

ハネムーンの ハネムーンの

青い空

(作詞 西条八十)

別府八湯ウォークはこれからも様々な物語を生みながらさらにゆっくりとすすんでいく。

(完)

追記

私の家より市宮竹瓦温泉まで九〇歩。朝風呂に入るのがこの上ない楽しみで、重厚な木造建築の竹瓦温泉に毎朝浸かれる幸せにいつも感謝している。

さらに、別府温泉に住んでいる人達も最高である。例えば日本の女性観光バスガイドのはしりである村上アヤメさん（九五歳）や流しのはっちゃん・ぶんちゃん等は今でも元気で大活躍している。私も「別府のまちづくり」のために少しでも役立てばとはじめた別府八湯ウォークガイドは今年で八年目、また別府資料を集めはじめて約三五年近くになる。「平凡の繰り返しが非凡な才能を生む」が私をいつも励ましてくれた師匠の言葉である。

最近では別府八湯の散策地図を片手に散歩をする老若男女の観光客が増えており、別府観光の本物の良さが伝わる「別府八湯ウォーク」はますます好評である。

この稿は、平成一五年九月〜一七年八月までの二年間にわたり別府市報に「別府八湯ものがたり」として連載されたものである。私が集めた写真資料と文章を、ご一読して頂き別府の良さが少しでも伝わればこの上ない幸せである。

終わりにりましたが、これまで別府のまちづくりをいろいろな所から応援して頂いた関係各位のみなさんに心よりお礼を申し上げますとともに、これからも引き続きご指導ご鞭撻の程をよろしくお願ひします。